The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	出島三学者の日本人論 ： 日本人の国民性をめぐって
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 7-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69924
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

出島三学者の日本人論
―日本人の国民性をめぐって―

中　直一

１　はじめに

本稿で筆者は、江戸時代に来日したケンペル(Engelbert Kaempfer, 1651-1716)、ツュンベリー(Carl Peter Thunberg,1743-1828)、シーボルト(Philipp Franz Balthasar von Siebold,1796-1866)の三者、いわゆる出島三学者が残した浩瀚な記録文書の中から、日本人論ないし日本文化論と評し得る記載を集め、彼らが日本人をどのように把握していたのかを検討する。もっとも、彼らは「日本人論」と銘打った著作を残した訳ではない。彼らが著したのは日本についての調査記録や滞在記、江戸参府旅行記であるから、筆者はその中から、多少とも日本人論と言える発言を摘記し、それに対して分析を行う。

ます本稿で使用する一次文献および翻訳について説明を行う。また、本稿で引用を行う際の略記号についても記す。

《ケンペル》

・Engelbert Kaempfer, Geschichte und Beschreibung von Japan. hrsg. von Christian Wilhelm von Dohm, in 2 Bdn. 1777-1779 (Neudr. 1982)　本稿における略記：Bd.1はGBJⅠ、Bd.2はGBJⅡ

・ケンペル（今井正訳）『日本誌・改訂増補版』（霞ヶ関出版、1989年）　本稿における略記：日本誌

・ケンペル（斎藤信訳）『江戸参府旅行日記』（平凡社、1977年）本稿における略記：日記

Dohmの編集による原書は上下2巻(Band)の構成で、上巻に第1巻から第3巻（Buch）が収められ、下巻に第4巻から第5巻が収められている。これら全てを訳したのが今井訳『日本誌』であり、江戸参府の部分である第5巻のみを訳したのが斉藤訳『日記』である。

《ツュンベリー》

・Karl Peter Thunberg,Reise durch einen Theil von Europa, Afrika und Asien,hauptsächlich in Japan, in den Jahren 1770-1779. Aus dem Schwedischen übersetzt von Christian Heinrich Groskurd, in 2 Bdn. (1792-1794), Neudr. 1991　本稿における略記：Reise

・ツュンベリー（高橋文訳）『江戸参府随行記』（平凡社、1994年）本稿における略記：随行記

原典はスウェーデン語で書かれているが、筆者にはスウェーデン語を読む力が無いため、次善の策としてドイツ語訳を参照した。独訳の上下2巻(Buch)の内、下巻は2部（Theil）からなり、第1部は全5章(Abtheilung、第2部も全5章からなる。章の下に節(Abchnitt)が存在するが、上記邦訳『随行記』は独訳の第2巻第1部の全章と、第2巻第2部の第1章に相当する。ただし、邦訳と独訳では、少し構成が異なる。独訳第2巻第1部第5章「日本および日本人に関する一般的情報及び注釈」(Allgemeine Bemerkungen und Nachrichten, Japan und die Japaner betreffend)に含まれる8つの節と、独訳第2巻第2部第1章「日本および日本人に関する一般的情報及び注釈・続」(Fernere allgemeine Bemerkungen und Nachrichten, Japan und die Japaner betreffend)に含まれる8つの節が、邦訳では一つの章にまとめられた形になっている（邦訳第5章「日本および日本人」）。

《シーボルト》

・Philipp Franz Balthasar von Siebold, Nippon, Osnabrück (2.Aufl. 1897, Neudr. 1969)　本稿における略記：Nippon

・シーボルト（斉藤信訳）『江戸参府紀行』（平凡社、1967年）　本稿における略記：紀

行

シーボルトのNippon第2版は、2つの部(Abteilun)に分かれ第1部Geographische Forschungen und Reisen（地理的研究と旅行）が9つの部分に分かれ、第2部Volk und Staat（民族と国家）が5つの部分に分かれる。上掲の邦訳は第1部の2番目の部分の全訳である。

本稿で引用を行うに際しては、いずれも上掲の邦訳版から行い、引用文の後に出典ページを上記略記号とともに示した。また適宜原文（ツュンベリーの場合は独訳）を参照し、出典を邦訳からの引用と同じ方式で示した。

２　日本人の長所

まず日本人の長所について出島三学者が述べているところを見よう。日本人の礼儀正しさを賞賛する言葉を述べているのはケンペルである。

> 旅行中、突然の訪問の折りに我々が気づいたのであるが、世界中のいかなる国民でも、礼儀という点で日本人にまさるものはない。のみならず彼らの行状は、身分の低い百姓から最も身分の高い大名に至るまで大変礼儀正しいので、われわれは国全体を礼儀作法を教える高等学校と呼んでもよかろう。(日記 p.70)

ケンペル『日本誌』のうち、江戸参府について叙述した第5巻は全15章からなり、前半部（第1章から第6章まで）は旅行全般についての記述であり、後半部（第7章から第15章まで）は、長崎と江戸を往復した日々の記録を日付つきで記載した部分である。上記の引用は、旅行全体を述べた前半部の最後の章である第6章「オランダ人の参府旅行と彼らが途上で経験した待遇について」において見い出される。つまり個々の具体的な個人の礼儀正しさを述べているというより、むしろ江戸参府旅行の途上で出会った様々な日本人の態度を全体的に俯瞰した結果の発言なのである。

上記の引用文では日本人の礼儀正しさが指摘され、日本全体が「礼儀作法を教える高等学校」（eine hohe Schule aller Höflichkeit und guten Sitten, GBJⅡ, S.194)であるという、かなり強調した表現を用いて言い表されているが、もう一つ注目したいのは、こうした礼儀正しさが、身分に関係なく現れている、というケンペルの指摘である。上記のケンペルの発言がどのような文脈の中でなされているかというと、参府旅行の先々で宿泊した宿の主人の態度の礼儀正しさを述べた部分に続く箇所である。ケンペルは「旅館の主人らの礼儀正しい対応から、日本人の礼儀正しさが推定される」（日記、p.70）と述べ、この後で、上に引用したように「身分の低い百姓から最も身分の高い大名に至るまで大変礼儀正しい」と指摘しているのである。

身分の差が厳然として存在しつつも、その態度や振る舞いにおいて日本人全般に大差が無いことについては、シーボルトにも指摘が見られる。

> しかも日本人には、測り知れない富をもち、半ば飢え衰えた階級の人々の上に金権をふるう工業の支配者は存在しない。労働者も工場主も日本ではヨーロッパよりもなお一層きびしい格式をもって隔てられてはいるが、彼らは同胞として相互の尊敬と好意とによってさらに堅く結ばれている。(紀行 p.127)

シーボルトはここで、身分上の上下関係や経済的な格差が、日本では必ずしも個人間の人格的な敬意を阻害しないと指摘している。上記引用の「彼らは同胞として相互の尊敬と好意とによってさらに堅く結ばれている」の部分は、原文では“als Mitmenschen, durch die Banden wechselseitiger Achtung und Gefälligkeiten wieder um so enger verknüpft“ (Nippon, S. 138)となっていて、「同胞として(als Mitmenschen)」という言葉が、現実の身分の差を捨象した、人間同士の別次元の結びつきを強調していると言えよう。

このようなMitmenschenとしての結びつきの他に、シーボルトは日本の村人たちのおと

なしく謙虚な態度にも言及している。江戸参府旅行の最初においては、オランダ商館長一行は長崎から小倉まで陸路で向かうが、その途上矢上（やがみ、シーボルトはこれをドイツ語風に Jagami と記している）に到着した際、オランダ商館長一行を一目見ようと、多数の村人たちが押し寄せたこと、しかしその態度が非常に統制のとれたものであったことについて、シーボルトは以下のように記している。

> けれども群衆は道の両側に人垣を作っていて、われわれは妨げられることもなくその間を進んだ。黙ってびっくりして見ている彼らの様子や謙虚な態度には、少なからず感心した。(紀行 p.46)

旅の途上にある異国の人々を見ようと集まった人々の様子を、シーボルトは「謙虚な態度」“bescheidenes Benehmen“(Nippon, S.78)と表現している。即ち、無秩序に群衆が群がるのではなく、静かに押し黙って、驚きの表情を見せているのである。原文では“stummes Anstaunen“(ibid.)「押し黙った驚き」と表現されているが、矢上の村人たちの控えめな態度に対してシーボルトが感心した様子がうかがえる。

ケンペルやシーボルトは、このように日本人の長所についてあちこちで言及しているが、ツュンベリーも日本人について、次のように述べている。

> 一般的に言えば、国民性は賢明にして思慮深く、自由であり、従順にして礼儀正しく、好奇心に富み、勤勉で器用、節約家にして酒は飲まず、清潔好き、善良で友情に厚く、率直にして公正、正直にして誠実、疑い深く、迷信深く、高慢であるが寛容であり、悪に容赦なく、勇敢にして不屈である。（随行記、p.219）[1]

これは必ずしも長所ばかりを述べたのではなく、日本人の性格全般について、その長所も短所も含めて述べた部分（邦訳第5章「日本および日本人」の中の「日本人の国民性」と題された節）における記述である。ケンペル同様、礼儀の正しさを指摘しているが、もうひとつ「自由」を一つの特性として取り上げていることが注目に値する。別の箇所でツュンベリーは「自由は日本人の生命である。それは、我儘や放縦へと流れることなく、法律に準拠した自由である」（随行記、p.220）と、「自由」が日本人にとっての「生命」であるとさえ述べているくらいである。

このように日本人の特性を述べるツュンベリーであるが、日本人に対する賞賛というより、日本人が行った営み、およびその所産への賛辞も彼の文章の中に見られる。たとえば、日本では旅人のために里程を示す標識が非常によく整備されていることについて、ツュンベリーは次のように述べている。

> このような状況に、私は驚嘆の目を瞠った。野蛮とは言わぬまでも、少なくとも洗練されてはいないと我々が考えている国民が、ことごとく理にかなった考えや、すぐれた規則に従っている様子を見せてくれるのである。(随行記 p.107)[2]

---

[1] この部分に相当する独訳は以下の通りである。Die Schilderung des Charakters der Nation enthält im allgemeinen folgende Züge; verständig und vorsichtig, frey, gehorsam und höflich, neugierig, fleißig und in Handareit geschickt, sparsam und nüchtern, reinlich, gut gesinnt und freundschaftlich, aufrichtig und gerecht, ehrlich und treu, argwöhnisch, abergläubig, hochmütig und stolz, unversöhnlich, tapfer und unüberwindlich.(Reise, 2. Bd. 1.Abtheilung, S.155) なお上掲邦訳で「酒は飲まず」となっている箇所のドイツ語は nüchtern である。これは「しらふの」という意味の他に「冷静沈着な」という意味をも有するので、一見すると後者の意味に取るべきかとも考え得るが、実際にツュンベリーの上記引用の後ろの箇所を読むと、日本人はあまり酒を飲まないと論ぜられているので、邦訳は正しい訳であると言える。また引用文中の frey は frei の古い綴りである。

[2] この部分に相当する文章は、独訳版では見当たらなかった。ツュンベリーの上掲の引用文は、邦訳によれば 1776 年 3 月 8 日の日記の部分に記されている。独訳では 2.Bd.,1. Abtheilung, S.70 以下に 3 月 8 日の日記が記されているが、邦訳に比すとかなり記載の分量が少なく、独訳者が省略した可能性がある。

これは、街道にある一里塚等の標識が整備されていることを述べたあとに記された文章で、よく整備された標識を生み出した日本人の営為に賞賛の言葉を発しているものと解される。そしてまたツュンベリーは、風土の美しさや土地がよく開墾されていることについても、同様の言葉を発している。

> その国のきれいさと快適さにおいて、かつてこんなにも気持ち良い旅ができたのはオランダ以外にはなかった。また人口の豊かさ、よく開墾された土地の様子は、言葉では言い尽くせないほどである。(随行記 p. 129)[3]

ここでは、正面切って日本人の長所を論じているというより、ヨーロッパ文化圏以外の人間の中でも、合理的な文化があり、また土地がよく開墾されていることを指摘している。注意すべきは、最初の引用でツュンベリーが「野蛮とは言わぬまでも、少なくとも洗練されてはいないと我々が考えている国民」と述べている点である。つまりヨーロッパ人の目から見ると、当時の日本は文明の程度が劣っているという前提に立っていて、そのような低い程度と見なされた文明圏としては、意外に評価しうる点がある、というスタンスを持っていることがうかがえる。

このようなヨーロッパ中心主義的な見方は、実はシーボルトの中にも若干ながら見られる。それは、瀬戸内海を船で渡り、室（室津）に上陸した際、住民たちがオランダ商館長一行をあたかも大名行列であるかのように、地面に指先をつけて遇した際の記載である。

> われわれがたびたび日本の国民や国家を考察するに当たって、ヨーロッパにおける相似た状態に対して鋭い比較や風刺をあえてする場合があるが、われわれはこれを悪いもくろみでするのではなく、次のような確信があってするのである。すなわちヨーロッパ以外の古い世界に属し、恐ろしい人民戦争・宗教戦争の後で、二百年におよぶ太平をうけている開化された民族にあっては、国家ならびに国民の諸制度、のみならず宗教上の施設においてさえも、模倣ではないが、考慮し評価するに値する事情が現存している。（紀行 pp. 137-8）

この発言の前半部で分かるように、シーボルトは日本の状況とヨーロッパの状況を比較し、時にはヨーロッパの文物を風刺するかのような記載もあえて行ったことを記し、後半部ではその意図として、日本文化の中にヨーロッパ人にとって評価に値するものがあると自ら確信しているからである、と述べている。問題なのは後半部分に含まれる「ヨーロッパ以外の古い世界に属し、恐ろしい人民戦争・宗教戦争の後で、二百年におよぶ太平をうけている開化された民族にあっては」の部分である。原文では“bei dem civilisiertesten Volke der alten außereuropäischen Welt, welches nach fürchterlichen Bürger- und Religionskriegen einen zweihundertjährigen Frieden genießt“ (Nippon, S. 145)となっていて、要は日本人のことを「ヨーロッパ以外の古い世界では最も文明化された民族」と規定しているのである。斉藤訳では「開化された」となっているが、原文では最上級“civilisiertest (en) “であるので、「最も開化された」とか「最も文明化された」という訳になるところである。その文言に「ヨーロッパ以外の古い世界では」という限定句がついていている。つまりヨーロッパが文明化されていて、そうしたヨーロッパ世界を別とした比較対象の中での最上級が日本である、という論理である。シーボルトの場合、このように、日本の長所を書いてはいるものの、背後にはヨーロッパ文化中心主義的な発想が潜んでいると判断しうるのである。

---

[3] この部分に相当する独訳は以下の通りである。Außer in Holland habe ich keine so angenehme Reise als diese gemacht, so schön, reizend und bezaubernd ist das Land. Die Menge seiner Einwohner und seine Cultur übertrifft alle Beschreibung.(Reise, 2.Bd.,1. Abtheilung, S.80)

３　日本人の短所

出島三学者は、日本についての情報をヨーロッパ世界に発信したが、日本人・日本文化の長所だけでなく、短所についても報告を怠っていない。

日本人の高慢さを指摘するのはツュンベリーである。ツュンベリーは、日本民族が最も優れた人種であると日本人が信じ切っていること、そして、その根拠として太陽に由来する祖先を持つからであると理由づける日本人の歴史観・人種観を厳しく指摘して次のように述べている。

> 高慢は国民の大きな誤りの一つといえよう。いくつかのアジア民族が傲慢にも馬鹿げた思い込みをしているように、自分たちの神聖なる起源は神、天、太陽、月に他ならないと思いこみ、自分らは他の人種よりすぐれていると信じこんでいる。とくにヨーロッパ人は劣ると思っている。(随行記 pp.225-226)

これは、『江戸参府随行記』の第５章「日本および日本人」における記載である。「高慢」はドイツ語訳では”Stolz und hoher Dünkel”(Reise, 2.Bd. 1.Abtheilung, S.162)となっていて、直訳すれば「誇りと高慢」となる。いずれにしても、何についての誇りかが問題で、ツュンベリーが指摘しているのは、江戸時代の日本人が自民族の起源を神にありとしているという歴史観であり、またそれゆえヨーロッパ人よりも日本人が優れているとする人種観である。おそらくはツュンベリーが接した長崎の通詞や江戸の蘭学者の中には、日本の歴史について古事記や日本書紀に基づいた日本人起源論の情報をツュンベリーに披瀝した人がいたのであろう。ツュンベリーにこのような情報を提供した日本人が、本人自身としてどの程度こうした起源説を信じていたかどうかは別として、少なくとも情報提供を受けたツュンベリーは、日本人全般がかかる日本人起源説を信じているものと見なし、それに対して批判的考察を加えたと目される。

江戸時代の日本人が、自民族の起源について誇らかな自意識を持っていることについては、シーボルトにも言及が見られる。但し、ツュンベリーのようにそれを否定的に論じているというより、むしろこれを西洋人が利益誘導に活用すべき日本人の「弱点」と見なしている。

> 日本人は自分の祖国に対しては感激家で、先祖の偉業を誇りとしている。教養ある人も普通の人も天皇の古い皇統に対し限りない愛着を抱き、古い信仰や風俗習慣を重んじる。それゆえ外国人が、日本人の民族性に追従し、彼らの宗教や風俗習慣を尊重し、そして原始時代の伝説や神として崇められた英雄の賛美に好意をもって耳をかたむけるのは、非常に結構なことである。／日本人のこうした弱点を昔のオランダ人はたいへんよく知っていて、それを利用することを心得ていた。(紀行 p.84) [4]

日本人の民族起源論について、ツュンベリーが「高慢」という評価をもって否定的に論じているのに対し、シーボルトは、こうした日本人の意識を逆手にとって、いわば追従――シーボルトの言葉では”schmeichel(n)”(Nippon, S.106)――することにより、過去のオランダ人が日本における貿易の利権を保持し続けたことを示唆的に述べているのである。

このように、日本人の「弱点」”schwache Seite”(Nippon, S.106)を指摘したシーボルトであるが、彼はまた別の箇所で、日本人の性格や国民性とは別次元の欠点を指摘している。それは、江戸時代の身分制度が有するものであり、いわば制度的・構造的な欠点である。シーボルトは、とりわけ身分の高い階層の人々に関して、次のように述べている。

> 日本の高貴な人々は家柄や礼儀作法にかたく縛られているようにみえ、その人の自由な意志はもはや全く問題にならない。服装・従者・旅行の道具・紋章・通路・一日の旅程・昼食・宿泊・そのうえ休息や娯楽の場所さえもあらかじめ身分相応に決められ

[4] 邦訳の「結構なことである。」と「日本人の」の間には改行があるが、本論文では紙幅の都合で追い込みで記載し、改行箇所を／で示した。

ている。(紀行 p.30)

オランダ商館長一行は、江戸で将軍に拝謁する機会を与えられるのみならず、京都や大坂（大阪）においても奉行等の幕府高官を表敬訪問する機会が与えられていた。商館長一行は、こうした日本の武家社会の高位高官との公式な場での面会の機会が極めて多かったがゆえに、彼らが接する「日本の高貴な人々」の姿も、個人としての人間性を発揮するような場での人間でなく、公的拝謁の場で己の姿を見せざるを得なかったのであろう。こうした公的な場での振る舞いについては、個人の自由が発揮され得ず、まったく型通りに振る舞うべく定められた形式主義的な人間像が提示されているようにシーボルトには思われたのであろう。

これとは別にシーボルトは、日頃接する通詞たちに対して非常に厳しい見方を示している。

> 私は、われわれの旅行中種々の状況のもとで登場する通詞たちを読者諸君に紹介するが、その輪郭はとくに興味深いものではない。しかしこうした職業の人々は代々ヨーロッパ人との交際によって、長所も少なくはないが、短所の方をずっと多く受け継いでいるので、彼らを本来の日本人と混同してはならないということを、私はあらかじめ注意しておきたい。（紀行、p.8）

通詞は、単なる通訳でなく、日蘭貿易の仲介をなす商務官的な存在でもあり、かつオランダ人の行状を監視する責務も帯びていた。通詞の役職について、片桐一男によれば「総じて、長崎奉行とオランダ商館との外交・貿易交渉の事務を弁ずる通訳官兼貿易官であった」[5]とされる。また沼田次郎によれば、「要するに通詞はオランダ人の長崎移転後は貿易取引上の手足となり通訳となる一面、また一方ではオランダ人の取締りと監視の任務を担うことになったわけである」[6]とされる。こうしてオランダ人を監視する立場にもあった通詞は、当然のことながら、オランダ人側にとっては有り難くない側面も有する存在であった。

シーボルトはこのような通詞について、「本来の日本人と混同してはならないということを、私はあらかじめ注意しておきたい」”so will ich im voraus bemerken, daß man (...) nicht mit den eigentlichen Japanern verwechseln darf “(Nippon, S.51)と述べ、通詞が普通の日本人とは違う種類の人間であるかのような記述をなしている。それだけシーボルトをはじめとする出島のオランダ商館関係者は、通詞の普段の行状に不満を覚え、かつ、それが他の日本人の様態とは全く異なるものであることを認識していたのである。

同様にケンペルも通詞について「泥棒根性の通詞ども」（日記、p.64）”die diebischen Dolmetscher”(GBJⅡ,S.190)、あるいは「陰険な二人の通詞」（日記、p.302）” unsere beiden heimtückischen Dolmetscher”(GBJⅡ, S.365)と、辛辣な形容語を「通詞」という語に冠している。その他にもケンペルは通詞の判断能力のなさも指摘している。それは1692年の第二回江戸参府旅行の途上、下津井（岡山県）から室（兵庫県）に向かう前に暴風雨に遭遇した際の記述に見られる。ケンペルはいち早く暴風雨の接近を予見し、船を港に入れることを進言したが、大通詞はそれを許さなかった。その結果、船は港に入らぬままの状態で碇を降ろし、暴風に遭遇して帆柱が倒れた。その時の様子をケンペルは以下のように記している。

> けれどもその原因は、われわれがちゃんと港に入らず、港からずっと離れて船を停めていたからで、町の近くや他の船の傍にいる楽しみをわれわれに与えたくない例の意地の悪い大通詞が、このように処理したのであった。（日記、p.263）

---

[5] 片桐一男『阿蘭陀通詞の研究』(吉川弘文館、1985年)p.49

[6] 沼田次郎『洋学』(吉川弘文館、1989年)p.12

ここでもケンペルは「例の意地悪い大通詞」（der bösgesinte Oberdolmetscher, GBJⅡ S.335）[7]と、大通詞の語に「意地の悪い」という形容句を冠している。そして、このような形容句を冠する理由は、ここでは、暴風雨に対するオランダ商館長一行の安全性確保よりは、オランダ人が他の日本人と接して諸々の西洋事情が漏洩する危険性の方を重視して、あえて船舶の入港を許さなかった大通詞の判断に向けられているのである。

ケンペルもシーボルトも、通詞には厳しい評価を下しているが、これらは、いわば通詞の役人根性とも言うべき職務上の特性に向けられた批判的言辞であると言える。つまり日本人全般については好意的な評価を与えつつ、職務上の振る舞いが役人的な形式主義に陥りがちな日本人の側面には厳しい評価を与えている。こうした二つの方向性は、実は明治時代に来日したドイツ人医師ベルツ(Erwin von Bälz、1849-1913)の発言にも見られる。ベルツは日本人全般について、花見を楽しむ人々を例に取り、「行儀のよさが骨の髄までしみこんでいる国民だ」[8]との感想を記す一方、来日の際に港で入国審査に当たった税関吏に対しては「ところが、西洋の言葉を一つとして話せる者がいないのです。わたしの身分証明を差し出すと――評定。わたしにはいすがあてがわれました。しかし誰も、私の荷物の世話をするように手配してはくれないのです。」[9]と、外国人への対応のために内輪の相談に専心するあまり、賓客たるべき外国人教師を遇することを忘失してしまった――おそらくは外国人教師であるということすら当初は認識せずにいた――税関吏に不満を述べている。

このようなベルツの言葉から逆に、ケンペルやシーボルトの見た江戸時代の日本人の姿が、実は後々にまで引き継がれるような日本人の特性を示すものであったことが推測し得るのである。

４　オモテ向きと内々

出島三学者が述べる日本人の長所と短所について考察を進めてき来たが、もうひとつ注目すべきは、彼らが三人ともに、日本人がタテマエとホンネを使い分けているということを指摘しているということである。

ケンペルは、外国人に対して情報を漏らしてはならぬとの誓約をなした日本人が、実は密かにケンペルに貴重な日本情報をもたらす存在でもあったことに触れて、次のように述べている。

> なお、特にわれわれと職務上接触する人々はすべて、祖国の事柄や宗教事情、秘密の国事、その他かれらに与えられた指示事項については、絶対にわれわれに知らせず、あかさぬことを誓詞と血判によって義務付けられているのである。（……）日本人は、極めて肝の据わった、気骨のある、聡明な人種であり、見たこともない信じてもいない”天地神明”に誓ったところで、”天罰”が下るなどとは思っていない。ただ秘密を洩らせば、上司から誓いを破った罪を問われ、厳罰に処されるので差し控えているだけなのである。（日本誌・上巻 p. *206*）[10]

---

[7] bösgesinte の綴りは、原文のまま。現代語式には bösgesinnte と、n を重ねて綴るべきところであるが、Geschichte und Beschreibung von Japan の編者 Dohm は古風な綴りを用いている。

[8] ベルツ(菅沼竜太郎訳)『ベルツの日記(上)』(岩波書店、1979), p.78。

[9] ベルツ、上掲書、p.39。なお『ベルツの日記』は、ベルツの息子トク・ベルツが編集したもので、日記の部分の他にベルツが故国の家族に送った手紙も含まれており、訳者による訳文も手紙の部分では「ですます」調になっている。

[10] 邦訳『日本誌』上巻のページ付けは独特で、まず目次、訳者のことば、付録として訳者今井氏自身のケンペル関係研究論文 8 本、刊行者(ドーム)の前書き、刊行者(ドーム)の序文、著者(ケンペル)のはしがきが、イタリック体のページ付けで p.*1*～p.*209* まであり、次いでケンペルの旅行記の部分が普通の字体のページ付けで p.1～p.345 まで続き、さらにその次の部分に索引が p.1～p.36 まで続く。上記の引用はイタリックのページ付けの部分に存在する。

これは江戸参府旅行日記の部分でなく、『日本誌』全体の序文”Vorrede des Verfassers”に見られる発言で、外国人に対する情報統制をかいくぐって、ケンペルがいかに諸々の情報を得たかについて述べた部分である。ケンペルの言によれば、日本人は「誓詞と血判によって」”durch Eid und Blutverschreibung”(GBJⅠ,S.LXV)外国人に日本情報を漏らさぬ事を誓うが、実のところ、神にかけて誓った誓詞については、当の日本人自身が束縛されているとは考えていないし、それどころか神そのものも信じていない。原文では”Die Japaner sind ausnehmend beherzt,herrisch und klug und lassen sich durchaus nicht durch einen Eid binden, den sie zu denen ihnen selbst unbekanten, und von ihnen nicht geglaubten Göttern und Geistern schwören.“(GBJⅠ,S.LXVI)と記されているが、上記今井訳「天地神明」や「天罰」と訳されている部分は、「自分が知りもしなければ信じてもいない神や聖霊に対して誓った誓詞には、束縛されることはない」という意味になる。つまり表向きは情報漏洩せぬ事を誓いつつ、内々にはちゃっかりと情報をケンペルに漏らしている訳である。（もちろん、それと引き換えに日本人はケンペルから見返りを得ていた。ケンペルやシーボルトがいかなる手段を用いて日本情報を入手したかについては、別稿を草して論述する予定である。）

外国人に対する禁止事項が必ずしも守られてはいなかったことについて、ツュンベリーも次のように述べている。

> 国や町に関する地図は、その輸出や外国人への販売をかたく禁じられている。それにもかかわらず、私はそのような地図の何枚かを購入する機会があった。その地図はケンペルの時代のものとまったく同じものであった。ただしケンペルの時はもっと容易に入手できたのである。それらは通常の日本、長崎、都そして江戸の町についての地図であった。(随行記 p.184)

地図は、利用の仕方によっては軍事侵攻の際の重要な情報源になる。それだけに江戸時代では地図の国外への持ち出しは厳しく制限されていたはずだが、実のところ、ケンペルの『日本誌』には京都や江戸の地図が掲載されている。ケンペルの『日本誌』に掲載された地図の図版をあらかじめ目にしていたツュンベリーは、上の引用に見られるように同じものの購入に成功したと報告し、制度としての禁令が実は必ずしも守られていない実態を報告している。

こうした、いわばタテマエの部分とホンネの部分の両方が存在することをケンペルもツュンベリーも指摘しているが、シーボルトはもっと踏み込んで「外向け」と「内向き」という二つの基準が日本に存在し、それを当の日本人が自覚しているという事態を指摘している。

> オランダ人一行は一方では外国人としての制限を受け、一挙手一投足を不安げに見守られるという、そんな監視のもとにあった。しかし他方ではまた多くのことがわれわれの態度、とくに案内者との協調如何にかかっていた。たとえ公の手段ではないにしても、内々に、つまり Binnenkant（裏面）の工作で、かなり多くのことがわれわれの利益となるように変更され、われわれの自由を束縛していた制限が除かれるかもしれないのである。この Binnenkant という言葉は Buitenkant（表面）の対語として日本の通詞たちがさかんに使うのである。(紀行 p.6)

通詞が「外向け」と「内向き」の二重基準を自覚し、しかもそのことを当の外国人であるシーボルトその人に公言していたことが、ここに記されている。外向けには外国人に対して監視をおこなう役目の通詞であるが、外国人の側の態度の在り様によっては、日本人通詞の表向きの態度が変化し得る、という訳である。シーボルトの原文では、最後のオランダ語の対語の部分は”unter der Hand - an der《Binnenkant》, wie es unsere japanische Dolmetscher im Gegensatz von《Buitenkant》nennen“(Nippon, S.50)と表現されていて、これは「われわれの日本人通詞が《Buitenkant》の対語として使う

《Binnenkant》で、すなわち内々に」という意味になる。ここから日本人の阿蘭陀通詞がシーボルトにオランダ語を用いて二重基準の在り様を述べていたことがうかがえる。

なお手近の独蘭・蘭独辞典（Langenscheidts Taschenwörterbuch der niederländischen und deutschen Sprache/ Langenscheidts Zakwoordenboek van de Nederlandse en de Duitse Taal. Berlin, München, Wien, Zürich, 1979）によればbinnenkantはInnerseite（内面）であり、buitenkantそのものは同辞書の蘭独の部には見出し語として掲載はなかったが、独蘭の部でAußenseite（外面）を引くとbuitenkantが掲載されていた。

シーボルトは、こうして日本人が表と裏、ホンネとタテマエの二重基準を有することを述べているわけだが、こうした用語を使っていないケンペルやツュンベリーも、先に見たように同じ様な観察をなしていたと考え得るのである。

５　おわりに

本論文冒頭で述べたように、出島三学者は、大々的に「日本人論」を展開した訳ではない。主に紀行文を記す際に、たまさか日本人全般、あるいは自己が接した個々の人々の特性についての所感を述べたという態である。しかしそこに表れた文言は、かなり明確に江戸時代の日本人の姿を示すものであり、それはまた現代の日本人にも通じるものであると言えよう。

ケンペル、ツュンベリー、シーボルトは、本論文で紹介したような日本人論の他に、もう少し具体的に日本の子供や女性、民衆についても実に様々な記録を残している。またツュンベリーやシーボルトの記録には蘭学者との交流も描かれ、さらにシーボルトでは所謂蘭癖大名と呼ばれる人々、即ちオランダ文化・西洋文化に多大の関心を示し、自ら多少のオランダ語を操った大名についての記述も見られる。

こうした人々についての出島三学者の発言を紹介することにより、江戸時代の前半と後半でいったい何が変化し、何が変化しなかったのか、ということが見えてくるであろう。これらが、次号以降での筆者の課題となろう。